

特集 21世紀の都市景観賞を考える..... 2

第14回福岡市都市景観賞受賞作品 5
FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD 2000

わたしのまちの景観
福岡市景観エッセー 9

都市景観室事業 13



さいと

「彩」はかがやき、「都」は都市の意。
人がかがやき、まちがかがやき、
都市が彩られていく。
そんな都市・福岡のイメージを表す。

特集 21世紀の都市景観賞を考える

福岡の元気を支えていく、 そんな景観賞でありたい。

第14回目を迎えた福岡市都市景観賞。多くの市民の応募の中から101の受賞作品が誕生しました。そこで、第一回目から審査にたずさわってこられた審査員の先生方にお集まりいただき、これまでの都市景観賞を振り返ってもらい、今後の都市景観賞の在り方を語っていただきます。



元九州産業大学教授 中村 善一

九州芸術工科大学教授 佐藤 優

(財)福岡都市科学研究所主幹研究員 岡 道也





② FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD 1988



③ 1989 FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD

福岡市都市景観賞のあゆみ

中村 最初は応募件数も153件と少なかったです。でも、目立つ作品はつきりしていて審査もスムーズに進んでいたような気がします。そんな中、浄水通りにある小さな花屋さん「マージ・オーキッド」も人選し、小粒だけダイヤモンドのように街並みの中で光っているという作品があったのは際立って印象的でした。やがて、福岡市内にも新しい施設が次々に誕生し、第3回目、4回目くらいから景観賞にも弾みがついてきました。

岡 最初はやはり福岡市の顔となるような建物が選ばれていた。「福岡銀行本店」や「福岡シティ銀行本店」など。平成に入って、4回目、5回目くらいからは、福岡がますます元気になってきて、次々に誕生する建築物が景観そのものを変えていきました。そしてよかトピアが開催され、ウォーターフロントが注目される中で、6回から8回にかけて「シーサイドもち」に関わる受賞がとでも多かったですね。これはひとつの展開方向だったと思います。それに加えて、5回目から特別表彰が加わり、「博多駅周辺発展会」や「ミュージアム・シティ・プロジェクト」など行為や活動に対して賞を与えるようになりました。これは都市景観賞を考える上で大きな節目となり、かなり大事な方向転換になったような気がします。そして13回目以降、保存建築物などの件数が多くなり、ずいぶん変わってきたという印象を受けます。

中村 景観賞が制定された当初は、行政側で

も市民側でも景観に対する基本的な意識が形成されていなかったのではないのでしょうか。景観賞という概念の理解のしにくさをみんなが感じていました。それが、毎年いろいろなもの表彰されていき、都市の景観的な価値に対しての目覚め、意識が形成されていきました。それにあわせて次第に応募の件数も増え、物的な景観から目に見えない感性の景観というもので浮かび上がってきます。さきほど、岡先生がおっしゃったように、活動を評価するという仕組みが生まれたのと同時に、市民の感情というか、心の奥底が景観賞ににじみでてくるような感じがして。今、景観賞を通して、都市景観の幅の広さ、奥の深さみたいなものを感じています。

佐藤 5回目までは啓蒙期という感じで、景観賞を市民に知らせるという役割が大きかったです。また、建築家に対しての意識の改善を図るというアピールもあつたように思えます。それ以降は、福岡の元気の良さの原動力となるかなり大型の良い建物がどんどん建ってきて、誰もが納得できる景観が入選作品に選ばれてきています。しかし、10回目あたりから、少しずつ市民から離れてきたかなという反省が審査の中からでてきて、もつと生活に根ざしたものが評価できないかと考えるようになりました。例えば、11回の「名島橋」や12回の「西鉄カリテン」など。そして、



④ FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD 1990



⑤ 1991 FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD



⑥ FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD 1992



⑦ 1993 FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD

13回目以降は、バブル期のような派手な建築物だけを追って行くのではなく、もつと蓄積型のものを評価しようという動きがでてきたんです。蓄積できる景観というものの意味を考えてきたわけですね。5回目を記念して特別賞を設定し、10回目に転機が訪れ、次の15回目からどんな方向性を目指して行くべきかという、さらなるステップアップの時期が訪れていますね。

景観賞の影響と役割

中村 都市景観というのは市民の共有財産です。それを大事に育てていくことによって、市民の感性も養われ、また、養われた感性で都市景観がもつと濃度の濃いものになっていくと思います。

岡 景観賞が生まれるまで、行政といえば禁止事項だけを指し示すような体制だったように思います。それが景観賞の登場によって、いいものは認めていこうというスタイルが生まれ、市民の関心もどんどん高まっていったんじゃないでしょうか。

佐藤 そうですね。最初は150件くらいの応募でしたけど、今では700件以上の応募がくるようになりましたね。それに市民の関心が高まったと同時に、景観賞のステータスを最初に高く設定していたため、建築関係の人が権威ある賞だと感じるようになりました。過去の受賞作もそうそうたるものです。中村 他の都市ではこれだけの作品はなかなか揃わないでしょう。



岡 そうですね。他の都市には失礼ですが、福岡はすごい作品を選んでいるなという感じがしますね。

中村 以前、街中にある商業ビルに、周辺の景観と調和するようなデザインを考えてくれないかとお願ひしたことがあります。そういうことをお願いできるような場ができたというのは、景観賞のおかげではないかな。いいものを造るというムードが街全体に生まれているんですね。

佐藤 建築家や建築関係の方にとってはいい刺激になっていると思います。また、建築関係の方々はおーナーに対して、「景観賞をとりますよ」という、いい説得材料になっているんじゃないでしょうか。これだけいい物件が毎年福岡市に誕生しているのに、受賞できるのは6点、8点。それが街に記録され、評価されるとするのはとても誇りに思えることだと思いますよ。

岡 複数の建築家の方から「景観賞受賞はうれしいよ」という言葉を聞きます。心強いことですね。

佐藤 そういう建築家の方々と名前が並ぶというのも価値があるんじゃないかな。

中村 年月を追う毎に審査員だけでなく、市民の目もだいたい厳しくなってきたように思えます。育ってきたともいえますが…。

佐藤 今年、注目したのはエッセーです。今



⑧ FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD 1994



⑨ 1995 FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD



⑩ FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD 1996



⑪ 1997 FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD

まで景観を空間的なスケールでしか見ていなかったものが多かったのですが、今回の作品の中には時間軸で景観を捉えているものもあり、景観賞を選ぶ上で継続的な視点がいるという点を改めて感じました。

中村 すでに消えてしまった景観にも賞を与えらるかと。

佐藤 いいですね。消えていった景観賞(笑)。

中村 いろんな角度から景観を評価するチャンスを与えたいですね。

世界に誇れる福岡を！

中村 15回目を迎える今年は、21世紀の始まりでもあります。100年間というスパンで景観賞を考える必要があるのではないのでしょうか。すばらしい福岡市をつくってほしいというビジョンののっとなって、景観賞の意味合いを根本から検証していく必要があります。

佐藤 都市化が進んでいくと、都市そのものが市民の庭にならなければいけないでしょう。庭にふさわしいような魅力ある街を創造する。そのためには豊かさを追求する活動が大切なものになります。景観賞は、そういう都市の豊かさを追求するかなり重要な役割を担っているのではないのでしょうか。

岡 これからは、いい悪いを一方的に決めていくのではなく、いいのか、悪いのかを議論する機会をもっと持つべきだろう。

中村 都市景観賞のミドルクラスみたいなもの。もう少し柔らかい評価で選べるものもあってもいいと思います。

佐藤 奨励賞のようなものですね。

中村 華景観賞みたいなもので。新進の建築家が意欲をかき立てられるようなものがいいですね。なにしろ、これから

は福岡の今までの元気の良さを維持していかないといけない。経済は落ち込んでいるかもしれませんが、文化は落ち込むことはありません。その鏡が景観賞ではないでしょうか。国際的な視線も意識しながら、景観賞を通して世界に誇れる福岡の都市形成の年輪が豊かに刻まれるようにと願っています。

岡 景観賞は市民からの推薦が大原則だけれど、推薦はなくてもいいものを拾い上げる体制づくりもほしいですね。福岡にはまだまだ埋もれている景観がたくさんあるはずですよ。

佐藤 15回目を迎えるにあたって、見失いつつある目標をもう一度明確に打ち出し、市民にも行政にも新しい指針をアピールしていきましょう。

中村 そうですね。日本は長い歴史の中で、秀逸な建築物をたくさん生んできました。福岡も一時期のような派手な動きはないかもしれませんが、いいものを創造したいという人々の情熱は絶えることはありません。これからもすばらしい景観が福岡に誕生し続けますよ。そしてそんな福岡市の元気なエネルギーを受け、福岡市都市景観賞は、歴史を重ねさらに価値あるものに成長していかなくてはならないでしょう。



⑫ FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD 1998



⑬ 1999 FUKUOKA URBAN BEAUTIFICATION AWARD